

できた！ぼく、できた！

若葉台保育園（福島県いわき市）

[3・5歳児]

事例 3歳 砂遊び

<6月中旬> 園庭で5歳児が泥団子作りを始める

▲団子作りを見て、「やる！やる！」と3歳児のまねが始まる。

年上の子がやることにも興味をもち、同じようにやってみたいといふ気持ちが芽生えている。5歳児は上手に泥を丸め、団子の形にしていくが、3歳児は泥を団子にするのに苦戦している子が多い。「できない！」と、すぐに諦めてしまうG児。5歳児が作るのをうらやましそうに見ているI児・J児。すると、5歳H児が優しく教えてくれる。それを聞いて、★「うんわかった！」と、また泥団子作りを始める。

5歳児と一緒にいるということで、活動にも長い時間取り組んでいた3歳児。

●何回も割れてしまったり上手く丸まらなかったりする体験を繰り返す。

「どうしたらきれいな泥団子が作れるか」を、自分なりに試したり5歳児のまねをしたりしながら考えている。また、じっくりと泥団子作りに取り組むことで、砂や泥遊びの面白さを更に感じることができた。

<7月上旬> 園庭で砂遊びを始める

▲「先生、お山作ろう」と、T児。※「いいよ。じゃあ先生、大きいお山作ってみたいな～」と言うと、「いいよ！」「作ろう！作ろう！」と、はりきって砂場に向かう子どもたち。砂場に着くと、「ぼくと、AちゃんとBちゃんはこっちで、CくんとDくんはそっちで作ってね」と、E児。「どうして2つ作るの？」と聞くと、「2つ作って合体させたら、もっと大きくなるから」と、答える。それから、「大きくなあれ、大きくなあれ」の掛け声をかけながら、砂山作りは進んでいく。途中で、「お水かけられると硬くなるよ」と、F児。「どうして硬くなるの？」と、聞くと、「だって、お水は砂を硬くしちゃうんだもん」「お団子作る時も、お水かけるから」と答える。前に泥団子を作った時のことを、自分の経験として思い出しながら、今回の活動に生かしている。

それから、ジョウロやペットボトルで思い思いに水をかけていく。F児は、砂山の同じ所に水をかけ続ける。

★「先生、見て！お山に穴があいた！」と、驚いて教えに来る。

保育者が「どうして、穴あいたらいいの？」と聞くと、F児は「ん～、だってお水はお砂より強いから！」C児は「水かけたから、砂が溶けちゃったんじゃないの？」と言い、D児は、砂に水が浸みてどんどん無くなっていくことに気付く。「先生、お水無くなった！」と、水の浸み込んだ所を指差して言う。水をかけた所を堀りながら、中をのぞき込み、水がどこにいったのかを探す。



考察

まったく同じ遊びでも、3歳児と5歳児では反応も遊び方も違っていた。また、同年齢の子どもだけで遊んだ時には、見られなかった子どもの姿も見られた。3歳児は、上手くいかなければ、5歳児の作り方をじっと見てまねしようとしたり、教えてもらったりすることで、より集中して活動に取り組むことができた。互いに刺激し合うことができたように感じた。

また、泥団子作り、砂山作りの両方で、子ども自身が考え、工夫したり自分の経験を思い出したりしながら活動を進めている姿が印象的であった。それが、正しいか間違っているか、上手くいかず失敗するかは、保育者が教えてしまうのではなく、子ども自身が経験を通して理解していくことが大切だと改めて感じた。上手くいかない経験、失敗の経験も子どもにとって大切なことなのだとわかった。

事例 5歳 泥団子作りから土器作りへの活動 「できた！ぼく、できた！」

<6月中旬> 園庭の砂場で、泥団子作りが始まる

上手に丸め、団子の形にしていく5歳児の隣で、3歳児は団子の形にするところから苦戦している。「ほら、丸くなってきた！」と自慢気に見せる5歳児のA児とB児。うらやましそうに見つめる3歳児、「どうやって作ったの？」と聞く。A児は「ぎゅっ、ぎゅっ、って丸めるの。こうやって。でも、力入れ過ぎるとだめなんだよ」と、優しく教えて

いる。3歳児も5歳児と一緒にだからか、長い時間集中しているようだ。

水を足したり、白砂をかけたり、力を入れたり、擦ったりすることを繰り返し、思い思いの泥団子ができた。いつもなら、自分の下駄箱に、そのまましまっておくところだが、※保育者が用意したナイロン袋を手渡すと、できた泥団子を袋に入れ大事そうに下駄箱へと運び置いた。

<6月中旬 翌日> 前日作った団子が割れないと気付く

★翌日、いつもだったら水分が飛んでしまい、割れてしまうことが多い泥団子だが、割れないと気付く。▲登園した時、気付いたC児は、身支度を整えると、早速、昨日の続きをを行う。一人が始まると、一人また一人、泥団子作りがどんどん広がる。次第に団子が滑らかになり、今までにないような泥団子が完成する。

「これ、すごいでしょ！」と嬉しそうに保育者に見せに来るC児、D児。「ちょっと、触らせて」と、興味津々の3歳児。●「すごいね」「力チカチだね」「サラサラするよ」と、3歳児の言葉に嬉しそうなD児だった。



<6月下旬> 泥団子作りが継続している

泥団子作りが継続している実態を踏まえ、考古資料館へ体験学習に出掛け、土器や貝塚の見学をする。実際に触らせてもらうと、「硬いね」「冷たいね」と微笑みながら伝え合う。館長さんが、「これは、昔の水筒だよ。これも土を焼いて作ったんだよ」と言うと、「ぼくのと同じ！」と目を丸くするE児。

次に、土器作り体験をする。土器作り用の土粘土を一人一人渡されると、早く触りたくて仕方ない子どもたち。F児は、すぐに鼻を近付けて匂いを確認しようとする。すぐに手を伸ばしたG児は「うわっ、冷たい！」と驚いたような、わくわくしたような表情を見せる。

作り始めると、みんな真剣な表情。自分の手元を見つめる眼差しがいつもより鋭かった。●それぞれに土器を作りあげた。いつも活発だが、土器作り中はあまり話さず真剣だったE児は「できた！ぼく、できた！」と、感情のこもった言葉を発した。同じ言葉でもこんなにも違うのかと思うほど、達成感に満ちた一言だった。本物の土器を見てからの土器作りだったので、「ぼくにできるかな？難しそうだな？」と不安があったのかもしれない。だから、できた時の達成感はより強いものになったのだろう。



<8月中旬> 焼きあがった土器が届く

子どもたちは、「ぼくの！？ぼく作ったある！」「やったー！」と、喜ぶ。大事そうに両手で包み込むように持ち、腰を曲げる様にしながら自分たちの部屋へと運ぶ。

ちょうど、3歳児のクラスで土粘土遊びをしていた。3歳児担任から、子どもたちに見せて欲しいとの要望があるので、何人かずつ自分の土器を持ち、3歳児に土器を披露する。「これは、土器って言うんだよ」「土でできるんだよ」「焼いたんだよ」「硬いんだ」と、3歳児たちに、得意そうに話す5歳児だった。●同じ年齢の友達の中では自己主張の弱い1児も、3歳児の前でしっかりと自分の思いを言葉にできていた。

考察

身近な土・砂を素材に、どうやれば上手くいか力加減に注意し、細かに指先を使い、真剣に取り組む姿がたくさん見られた。3歳児とのかかわりの中で、知っていることを教えたり、できた泥団子を「すごいね」と言ってもらったりして、嬉しそうにする姿が見られた。特に同じ年齢の友達とのかかわりでは、自己主張の弱い1児が、3歳児の前では自分の作った土器を堂々と発表することができた。発表できることが目的ではないが、その後園庭の片隅で、3歳児数名を前に、自分が園庭で捕まえたダンゴムシを「これ、すごいでしょ。見せてあげるよ、順番だよ。ジャンケンしてねー」と、雄弁に話していた。自己表出の場ができた1児の姿から、保育者はその子なりの居場所を作つてあげられるよう支援することの大切さに気付かされた。

ポイント

日々の保育を振り返り、今後の援助や環境を考えるために保育の記録は大切です。この事例のように、分析の視点を押さえて項目ごとに保育の記録に印をすることによって、幼児理解を深めることができます。事例では、同じ砂場での活動であっても、3歳児と5歳児のそれぞれのかかわりや体験の内容を把握することで、発達や実態に応じた保育に結び付いています。また、5歳児らしい土器作りまでの展開はもちろん、その後の3歳児とのかかわりまで見届けて記録する保育者の読み取りは、子どもの「科学する心」の育ちを捉える力にもつながります。